精神保健看護

報告者：大島泰子

教育及び実践の課題

精神保健看護はオレム･アンダーウッドモデルのセルフケア理論の活用により発展してきた背景がある。心理社会的介入は精神疾患の回復に必要とされる根拠に基づいた実践であり、精神保健看護の実践に定められているが、まだ十分に活用されてはいない。

活用した論文の概要

精神保健領域の看護師がトレーニング後に実践した PSI（psychosocial interventions（心理社会的介入）とサービス利用者の効果について Butler ら（2014）は質問紙を用いて調査した。

トレーニング後の各 PSI 項目の実践頻度の増加は統計的に有意差を認めた。また、トレーニング後の各 PSI 項目の実践頻度の高さと研究対象者が認知したサービス利用者の良好な結果はほどよく関連付けられていた（P=0.009）。

PSI を看護実践に根ざすためには、看護管理者は PSI のトレーニングを受けた看護師に PSI の実践に専念できるポジションを保証する必要がある。また看護基礎教育のカリキュラムに PSI の内容を含めることにメリットはあるが、そのためにもまず始めに臨床へスーパービジョンを導入し、PSI とサービス利用者のフィードバックを統合させる必要がある。

教育及び実践への活用

教育への活用：以下の 3 点について検討、考察した。

①心理社会的介入の講義内容へ本論文の PSI トレーニングにおける教育内容と実践頻度の高い項目を組み入れていく、②第 2 段階と第 3 段階の臨地実習で心理社会的介入に関連する集団精神療法等への学生の参加を薦め、理論と実践のつながりについて理解を促すことを継続する。また対象と学生の関わりの一部が心理社会的介入になることも多いため、基本的な心理社会的介入の理論と方法を各教員が共通理解していく、③当領域の 2014 年度統合科目群では、ストレス脆弱性モデルを活用した心理教育を用いた学生が 1 名、家族への介入に生活技能訓練（SST）を用いた学生が 1 名であった。根拠に基づいた心理社会的介入を教育に取り入れることは、精神保健看護の専門性を学生が知る機会になる。第 2 段階、第 3 段階、第 4 段階の各臨地実習でのねらい、目的、目標に沿って段階を追って心理社会的介入の教育内容を調整していく。

実践への活用：以下の 2 点について検討、考察した。

①通常施設外で受講している心理社会的介入のプログラムを、施設内の継続教育プログラムへ導入すること、②心理社会的介入に関するスーパーバイズと重症例等への支援では実践と相談、また多職種との役割分担や連携では調整の役割を考えた。当領域の専門看護師や認定看護師など高度看護実践に携わる者は心理社会的介入のトレーニングを継続し、これらの役割への期待も視野に入れ、研鑽する努力が必要である。

参考文献

Mary Pat Butler,Mary Begley,Kader Parahoo & Sophia Finn.(2014).Getting psychosocial interventions into mental health nursing practice:a survey of skill use and perceived benefits to service users,The Journal of Advanced Nursing 70 (4), 866-877